

西田哲学にみる華嚴思想の世界

岩井 貴生

キーワード：華嚴、一即多・多即一、事事無礙法界、絶対矛盾的自己同一

本稿では、華嚴思想の「一即多」「三界唯心」「四種法界」が、西田哲学にどのように取り込まれているかといった点に問題の所在を置いて考察した。

西田が主張した「絶対矛盾的自己同一」や「行為的直観」では、「個」と「他個」もしくは「個物」と「環境」といった二者の相即相入の関係性が説かれている。そこには、「一」と「多」の関係を相互に限定し合いながらもお互いが束縛される存在ではなく一如と成り得る、華嚴の「一即多・多即一」の論理が見受けられる。

「一即多・多即一」は、現象界における実体を否定する「諸行無常・諸法無我」がその根幹にあるからこそ成り立つ論理である。もし「一」が実体であれば「一」は「多」には成り得ないし、「多」も「一」と成ることも不可能である。『華嚴経』『十地品』の「三界唯心」では、「一即多・多即一」という世界観を現前できずに実相を見失う原因を人間の虚妄心に起因すると指摘する。

晩年に「場所の論理」に到達した西田も、「判断的一般者」「自覚的一般者」「叡智的一般者」といった三つの視点から虚妄的世界を脱自する論理を構築しようと試みている。その内容は「三界」をあたかも最初の「判断的一般者」「自覚的一般者」でとらえ、「叡智的一般者」が心の創り上げる妄想（三界）を超越させるかたちで表現されている。

「客観」対「主観」といった二元論を包み込む「絶対的主体性」の存在を根底に置く「叡智的一般者」の世界観は、正に華嚴の「事々無礙」の世界と類似する。華嚴の「事事無礙法界」は「理」と「事」を越えて「事」と「事」が相即相入した「一切一即・一即一切」の円融無礙となる世界であり、華嚴が説く理想世界である。「事事無礙法界」の段階に入ると、異なる性質を持つ「事」と「他事」とが相互に其々の存在を認め合い円融することが可能となる。この円融した華嚴世界から見れば、其々別々の「個」は世界の一部である故に、「個」と「他個」は同一となる。そして、「個」が「他個」を否定することによって、「他個」とは違う「個」の独立性が保障される。「個」が認識されるということは、「他個」の独立性も確立される。

西田は華嚴の「多」と「一」の相即相入の論理で成り立つ「事事無礙」と同じ構造を、「個」が「他個」に対して「個」であるという言い方で両者の区別を明確にしつつも同一であると主張した。ということは、西田幾多郎が難解な哲学的論理を駆使して解き明かそうとした内容とは、「事事無礙法界」の世界観と考えることが出来る。このように、西田は「個」の存在を尊重しつつ、「他」との共存を実現化するといった華嚴思想を哲学的方法論で再考し主張した。

これからも『華嚴経』や華嚴教学を文献的・歴史学的な研究は更に進展するであろうが、華嚴思想を「思想」として現代に活かすような研究を残したという意味では、西田哲学は評価されるべきであろう。華嚴世界に裏付けされた西田哲学の思想は、今後現代社会が抱えている争いや対立の世界を共存社会へと導くということに、存在意義を見出す方法論として実践性を帯びている。